東京新聞

人の一生は重き荷を負ふて遠き道を行くが如し急ぐべからず

月曜日及び大祭日の翌日は休刊　郵便物一ヶ月十五銭　郵便料金一部一銭　郵便料金七十銭　郵便料金一箇月一円　郵便料金七十銭　郵便料金一箇月一円

発行所　東京市京橋区南鞘町七番地　東京新聞社　支局　大阪市本町七番地　東京新聞社

印刷人　東京市麻布区霞町三番地　高木久一郎

編輯人　東京市麻布区霞町三番地　松本一郎

東京新聞　電話二一二番　振替貯金口座東京二一六番

雑録

倭城臺（上）

朝鮮史談　京城南翼生

木覓山の中腹、地平かにして氣清き高麗人之を倭城臺又は倭將臺と云ふ、日人亦稱へて得色わゝ、吾れ今倭城臺を調査して之を史談に加ふ。

按ずるに倭城臺又は倭將臺の稱は壬辰役乃ち豊太閤征韓役に起りたるものにして二百年前鮮人の新たに附せし名稱也、吾れ史を讀んで日鮮關係の史蹟を研究調査する毎に未だ曾て先人の霸圖を今人結業の基礎を築き据へつゝ來りたるを感せずんばあらず、倭城臺の如き即ち日韓關係の歴史を收縮せる政治上の興味ある地點也、吾人をして今しばらく往年の史實を辿らしめよ。

文禄元年四月（朝鮮宣祖大王壬辰）豊太閤水陸二十萬の兵を發して征韓の快擧あり、素より日韓を併合して東亞の盟主たらんことを期したりし也、加藤清正、小西行長之が先鋒として浮田秀家、毛利輝元軍奉を統ぶ。

先鋒の諸將釜山に上陸するや南韓の警備風聲に驚き戰はずして走るもの多く、先鋒諸將は長驅して五月既に京城に奮しぬ、行長は清正に先んずること一日東大門より入り清正は漢江を渡りて南大門に奮す、之より先南方の敗報京城に至る飾齒の如し宣祖大王顔色を失ひ群臣の諫を率ひて西方に遷座す、京城の混亂例へべくもあらず、行長一兵に紛らずして王城を占領し清正龍山に陣す、我兵王城を遥望し其壯觀に驚く、實に之れ李朝發祥の地にして北漢の山漢江の水、在昔鄭道傳、李穡等の諸豪傑が相せし山河の固めを畢竟何するものぞ一人の關に據て拒ぐものなし諸將既に京城に入る、浮田秀家、景福宮に陣す、毛利輝元城外に陣す秀家輝元等京城を第戰地とし諸將をして進退を計らしむ、小西行長、加藤清正、鍋島直茂、黒田長政、大友義純等の軍將皆奮時に明の援軍南下の勢あり、太閤即ち石田三成、増田長盛、大谷義隆をして遊軍六萬を以て應援せしむ伊達政宗も亦請ふて而して加はる。

明の大軍倭兵と勢を合せて小西行長を平壤に壓するに及び我諸將京城に集合す時に文禄二年一月也、十萬の我軍京城内外に陣を結びて明軍の至るを待つ寒月軍營を照らし諸將憂愁して睡らず浮田秀家五千餘騎と以て南別宮に陣石田三成、増田長盛、大谷義隆等各千餘騎を以て木覓山に陣す加藤清正、鍋島直茂、加藤光泰、前野但馬守、伊達正宗、小西行長、毛利豊政、大友義純、毛利豊岐守、島津义七郎、高橋九郎、秋月三郎、筑紫上野介等總勢五萬を以て城内各所に散陣し毛利輝元以下其他諸將は龍山方面を根據として南大門外より西大門外に陣す浮田秀家總司令官と辱ふと雖も軍謀策略は一に木覓山の遊擊將に出づ、木覓の中腹には人馬の往來勇ましく旋旗空に翻翻たり、鮮人遥かに望見して之を倭城と云ひ倭將陣云ふ倭城臺の名茲に此に起る。

卯月會俳句第九輯（三）

……△題、月さまざま……

一六百二十句中八十章逆列

抜粋上座　彩雲居　丹葉　撰

△月や野守りが宿は白地是空

鏡斗り更けた音なり月今宵凄霜

△月に傾げ盞す斗瓶かな海南

遥約せし人はなけれど雨の月竹賀

萬山は沈默守り海の月甍月

草ゝ木も若名月の光うへ田吾一滴

拍手や名月拜す樵の松藤は黒月澄ひ砂の上一樹

月千里甲板上の高咽し一抔

船曳に蹉跎まるゝ月見かな

楊蹉に供へ申す月の臘甍月

是れ丈けが若月の人須磨明石竹賀

山海萬里蹠征の士の月偲ぶ一滴

僧一人つくねんとして庵の耳柳仙

遷客云ふ爪操る念珠の水晶より澄た月のひゝ雫が、冷やり身に泌み……

……大悟徹底!!

第八

塵の更けて尻の冷つく月見哉一滴

遷客云ふ山鳥の尾の長〳〵し夜に時歌を貴る風雅猿のそれ……

外事一束

△加奈　陀白由黨失脚し保守黨新内閣成る龍理既報の如くエルホーデン氏也

△土耳　其は殆ど其唯一の武器たる伊人退去命令乙の干渉の爲撤回ぜりと

△伊土　戰爭は土の海軍なき爲窮莫たり伊の大軍のトリポリ活動を船碇せり

△トリ　ポリ内地に進入したる伊の斥候隊土亞勝合軍に驅逐さる唯一捷報乎

△武昌　革命黨蜂起し總督軍艦にて逃走し宜敢師及外人寺院に隱れ外國軍勇

△兵漢　口を警衛し總督衙門及布政使衙門焼業し第八鎮統制暗殺の報有り電

△信局　破壞され詳報不明なるも城内の激戰あり兵營三ヶ所焼失し銃聲激しと

△貴政　院成立し議場混亂なく議員分屬及部長瑞車互選平穏の中に了れりと

△清曆　八月一日より實施されたる防穀令は農作平年なる爲廢止せりと報ず

文苑

折にふれて　松琴生

○　たのしみがたるうぶすなの森

神棚に初穂うなへて家内どち

にごり酒くみ豊年祝ふ

○　秋の夜を更けてかへりし我を待つ

つまのれもわに心なごみぬ

○　よりそれし藤の長椅子初秋の

冷をねばねぬ窓の朝風

○　踏ゝみをはこりし友のめづらしく

さびしさかこつ初秋の宵

梁川庄八

第十一回

小金井蘆洲演

馬「偉ろう御成りでさいましたナ……瓜の蔓に茄子は果らねと云ふが……、御父上様に似参らせて瓜なら割らで其儘ちや」庄「ウム其方は亡父の戰場進發の供をしたと云事ぢやが、定めて當時の事は審かに覺へてをろう、今日追薦の御勤きと云者は金で鎌で草でも薙るやうだった、先手五橋の陣を薙拔けて小勢が……其功名も何にもならねへで七年前の今月今日腹を斬て死になつたは丈の手柄功名ト頭はしなすつた御方様が……、夫は大分討たれて半分剃りになつた、目差す敵に彼れだムラ〳〵掛に斬込んで花々敷討死をするだ、馬平達者で居る敵は引揚げたから、討洩された味方は漸つと味方は助かるサア一同敵の本陣へ斬込んだ突崩せば敵は驚ぎ出し内に死んの山だ、餓に敵は驚ぎ出し周囲で引揚げたんだが、其時本陣に敵に蓋り紋り付が旗六本盗去りに成て居たのを分捕をした、敵の奴等が皆引揚げたから、討洩された味方は漸つと味方は助かるサア一同敵の本陣へ斬込んだ突崩せば敵は引揚げたから、討洩された味方は漸つと味方は助かるサア一同敵の本陣へ斬込んだ突崩せば敵は驚ぎ出し内に死んの山だ、餓に敵は驚ぎ出し周囲で引揚げたんだが、其時本陣に敵に蓋り紋り付が旗六本盗去りに成て居たのを分捕をした、敵の奴等が皆引揚げたから、討洩された味方は漸つと味方は助かるサア一同敵の本陣へ斬込んだ突崩せば敵は引揚げたから、討洩された味方は漸つと味方は助かるサア一同敵の本陣へ斬込んだ突崩せば敵は驚ぎ出し内に死んの山だ、餓に敵は驚ぎ出し周囲で引揚げたんだが、其時本陣に敵に蓋り紋り付が旗六本盗去りに成て居たのを分捕をした、敵の奴等が皆引揚げたから、討洩された味方は漸つと味方は助かるサア一同敵の本陣へ斬込んだ突崩せば敵は引揚げたから、討洩された味方は漸つと味方は助かるサア一同敵の本陣へ斬込んだ突崩せば敵は驚ぎ出し内に死んの山だ、餓に敵は驚ぎ出し周囲で引揚げたんだが、其時本陣に敵に蓋り紋り付が旗六本盗去りに成て居たのを分捕をした、敵の奴等が皆引

廣告

中津物産卸商　定價表御申越次第郵送

蒲團各種○製綿○眞綿○長持

袋まわた○簞笥

大分縣豊前中津古魚町　蒲生林間屋

朝鮮大豆商　原田助市商店

冬物大賣出し

拾月拾五日より同貳拾壹日まで七日間

右期日中新柄取揃へ大賣出し仕候御買上げ金高に應じ相當の御添物進呈可仕候

尚見切反物並に釣切等澤山準備仕候

京城本町四丁目　長電話九番　山口呉服店

京城本町五丁目　電話二二四番　山枝呉服店

京城本町三丁目　電話一五七番　圓城呉服店

京城本町二丁目　電話七二六番　恵阪呉服店

京城本町四丁目　電話六八二番　末永呉服店

京城新報

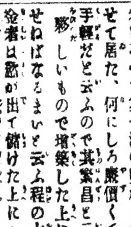
故伊公一週年祭

謹みて官民諸氏に白す

明治の元勳、憲政創始の大功勞者にして、且つ朝鮮併合準備の大任を全ふし後任者をして併合を行ふに易からしめたる、故伊藤博文公が、無幾や昭和貴族に列せられ、國民の爲めに狙撃せられ、終に薨去を遂げ、國民之を上下をして悲痛哀悼の涙を絞らせし明治四十二年の十月二十六日も、相折數ふれば早や二年の歳の昔となりぬ。嗚呼十月二十六日、これ我帝國の偉人伊藤公の人生の最大悲愴事に遭ひ物故せられし日として、國民の終世忘るゝこと能はざるの日なり。殊に、朝鮮在住民が嬉々として其業に安んじ、益々進展の途に在るを要するに故公の賜なりと願はゝ、在鮮民は公の永眠されし當日は一層の感謝を盡し、以て故公の靈に對して敬悼の意を表すると共に故公の偉業を深く銘せずんばあらざるなり。

そも〻故伊藤公が、維新の元勳として陛下の御親任厚く、内外の重鎮を一身に荷ひ、國家の爲め蹇々匪躬の節を全ふしたる偉績と偉動は、吾人の茲に喋々する迄もなく、世人の既に知る所なり、而して故公が第一世統監として任に朝鮮に殖され秋や如何。日露大戰役の後に際し、朝鮮の上下其結に安んせず、文物の衰微は殆んど其極に達したる、故伊藤博文公が、無幾や昭和貴族に列せられ、國民の爲めに狙撃せられ、終に殊去を遂げ、國民之を上下をして悲痛哀悼の涙を絞らせし明治四十二年の十月二十六日も、相折數ふれば早や二年の歳の昔となりぬ。嗚呼十月二十六日、これ我帝國の偉人伊藤公の人生の最大悲愴事に遭ひ物故せられし日として、國民の終世忘るゝこと能はざるの日なり。殊に、朝鮮在住民が嬉々として其業に安んじ、益々進展の途に在るを要するに故公の賜なりと願はゝ、在鮮民は公の永眠されし當日は一層の感謝を盡し、以て故公の靈に對して敬悼の意を表すると共に故公の偉業を深く銘せずんばあらざるなり。

チャンピオン傳（七）



朝鮮切ってのチャンピオン

料亭「はつね」の主人

相原七三郎君

吉原雀、賭機雀等である、昔唄に掛けたら恐らく當京城斗りでな

料亭「はつね」は南山町一丁目俗稱食傳新道の角に彼の松葉亭と相對して居るのだ、元南軍樓の立料理人であったが後食道樂の開業と同時に實際上の經營者となって其一流の腕揮に食通を唸らせて居た、何にしろ廉價で美味くて手輕だと云ふので其繁昌と云ふものは夥しいもので增築した上にも增築をせねばなるまいと云ふ程の大景氣に出發者は勘が出て儲けた上に、儲けたいと云ふので實際上經營者たり七三郎君と意見が合はない其所で七三郎君は身を退いて現の「はつね」を經營して呉えた腕に其江戸前を發揮して居る、生れは東京下谷區根岸御行の松の片時り初音の里である、其家號を「はつね」と呼ぶのは即ち此故である、惚れが料理人としての腕前は世既に定評ありであるが其長唄の嗜藝――イヤ表藝――に至っては一部人士を除げば汎く知れ渡って居らぬが此七三郎君こそは當地長唄界に於けるチャンピオンで、彼れの手ホドキは十一歳の時杵屋小三郎に依って出された而して三年間一心一稽古して居たが都合あって杵屋榮造に弟子入して五年間之れに就いて學んだが又都合あって勝太郎に就いて七年間都合十五年間と云ふもの一生懸命に學んだのである、元より好きで習ったのだから進歩も非常に早かったのである、詩とか和歌とかも此位巧手いと云ふこと紙上で御披露も出來ないのが遺憾だが兎角京城の藝妓中三太を他にしては七三郎君の右に出る者はない、元來長唄には杵屋即ち祖六左衛門から芳村、岡安、松永、佳田が別れて芳村、岡安とは歌唄ひの家柄で松永と吉住とは三味線佳田が即ち笛の家元と別れて居て現に芳村の家元伊三郎君は芳村派に屬して居て、住田と

澤庵漬込の時期は愈々目前に迫れり
極上等一本撰十七貫詰新澤庵漬壹挺
二十樽限の特價金參圓卅錢にて
本月中漬込御注文に應ず
京城南大門通り二丁目
東京澤庵問屋　キ印
電話九〇三番

最上山印醤油
千葉縣銚子町
醸造元　岩﨑重次郎
京城本町壹丁目
發賣元　三巳商會
電話七五三番

りん病患者に警告
サンタール麻病に特効あるは事実なり今や天下の認識する處となれり而かも本剤は刺戟なく危大劇薬の廣告を爲さず國産の良品にして一般の信用を博するに至れるは弊店の誇とする所なり
サンタールが麻病に特効あるは其薬効の見易き疾患は其薬効の如き麻病の如き疾患は其薬効の見易き疾患は外科醫手術の巧拙と均しく慮ると恰も麻病の如